

公益社団法人いわき青年会議所 2020年度 理事長総括

2020年度基本方針に沿って総括する。

【未来を切り開く人財の育成】

デジタル社会と言われるようになって久しいが、技術の進歩は凄まじく、それと同時に産業構造、社会のあり方までもが大きく変わろうとしている。私たち青年層であっても、将来に対する予測も出来ないぐらい変化が速い時代へと突入した。恐らく今後は更なるスピードで変化が起こるだろう。

未来を切り開くためには、時代の変化に柔軟に対応出来るだけの知識を有する事、経験を積むことが必要であり、これからの未来社会を生きていくには必要不可欠な要素であるとも言えます。私たち青年層であれば、知識を習得し未来を見据えた明確なビジョンを持つことはとても重要であり、それはJCであれ社業であれ必ず求められることです。奇しくも本年は新型コロナウイルスの流行により、ZOOM等を用いたWEB会議やWEBを併用した例会の開催が多くあったこともあり広く浸透したと思います。残念ながら、青少年事業として企画していた未来アドベンチャーを開催することは叶わなかったが、前向きに捉えるならば、まずは私たちの中でデジタル化が進んだということは、今後の社業やJC活動における大きな変化を起こす一手になったことであると考えます。

次年度以降の青少年事業を展開するにあたって、次世代を生きる子どもたちに、夢と希望が抱けるような運動を展開して欲しいと思います。その先には私たちが目指す「明るい豊かな社会」が訪れることであると確信します。

【新しいまちの魅力創造】

いわきJCはフラガールズ甲子園から離れ、フラをまちに活かす取組みへとシフトして以降、様々な視点からフラを推進する運動を展開してきた。本年は新型コロナウイルスによって、市内各地のイベントの中止やフラ教室の閉鎖などが相次ぎ、市民レベルで見ればフラに対する意識を高めることは出来なかった。しかしながら、いわきJCとして関わってきた事業を会員間で振り返れたことは、今後のフラに対する目線の置き方を変えるきっかけになったのではないかと考える。まちにフラの文化を根付かせ、経済活性化の一翼を担うまでになるにはまだまだ時間を要することになるだろうが、いわきJCが創った「いわきオハナフラ」を学校教育に取り込んでもらうなど運動を継続していけば、将来のいわき市はフラ一色に染まる日も来るかもしれない。まずは会員全員の意識を共有し、フラをいわきの誇れる文化であると認識し、積極的な運動展開をすることが望ましいと考えます。

そして、今年度は、広域性だからこそ有している自然環境や、数多くある公共施設を使

った運動展開を考えました。しかしながら、なにかをカタチとして残すことが出来なかったことは非常に残念である。

昨今の人口減少問題によって、公共施設は維持管理をすることが難しくなっている。しかし、簡単に失くせばいいと言えばそう簡単な話ではないはずです。公共施設は地域コミュニティの中心となる場所であり、災害時には避難所が開設される地域の重要拠点であるはずです。維持管理が難しいのならば、利活用する術を考え、残せるようにすることは私たち JC だからこそできる運動であるはずです。次年度以降、そのような視点で問題を考え、いわき市に提言できるぐらいの運動へ昇華することを切に願います。

【未来に誇れる力強いいわきの創造】

東日本大震災から間もなく10年の月日が流れようとしている。対内外に対して防災・減災に関する取り組みをしてきた。東日本大震災を振り返り、JC が何をしたのか、今後災害が起きたら何をすべきなのか、震災後の入会が9割以上の現会員と一時的な共有は図れたと考える。東日本大震災や令和元年東日本台風による災害を目の前で見てきたからこそ、次世代に辛かったことや悲しかった思い出を残すのではなく、災害に対する備えや先人の知恵を残すことが本当に力強いまちを残すことに繋がることと思います。

本年、その第一歩となったのがいわき市との災害時における協力協定の締結である。この締結は災害時にスムーズな支援活動を行えるように明確な協力関係を強化することが主目的ではあるが、災害時に協力することだけではなく、市民の意識を変えるために、いわき市、いわき市社会福祉協議会と平時においても3者間の協力体制を築き、共に市民に対する啓発や、防災訓練の実施など次年度以降の運動展開に期待できるものである。その地道な取り組みがやがて花開き、これから生きていく次世代の者たちへ残せる大切なことであると確信している。

また、例年開催してきた、いわき光のさくらまつりは本年、まもなく震災から10年目を迎えるにあたり、いわき市、富岡町からの強い要望と援助によって開催することが出来た。

10年の月日の経過とともに、震災の風化は進む一方であるが、「夜ノ森桜並木の再現」と発信することで、少なからず震災時の記憶を蘇らせ、今後の各個人の防災意識の向上を一時的に高めることが出来たと考える。今後の展望としては、震災を契機に始まった事業ではあるが、防災・減災への取組は別なカタチで展開し、いわき光のさくらまつりは、名称の変更やイルミネーションの質を向上させる等の工夫を凝らし、もっと市民が参加できる事業へと方針を変更する時期に差し掛かっていると考える。次年度以降、そのようなことを念頭に置きながら、様々な視点でまちづくりを考えて欲しいと思います。

【次代へ繋がる強い組織づくり】

組織とは同じ目的を持った個人の集合体であり、その組織が掲げる目的が組織を構成するメンバー全てに伝わって初めて組織としての体を成すものだと考えます。私たちは諸会議におけるセレモニーの中で必ず理念や使命を唱和し、JCという世界的な組織が持つ目的と使命を共有し、その会が行う活動への意欲を高めようと努めていますが、その意欲を本年度劇的に高めることが出来たとは言えません。新入会員として入会した際のセミナー等では組織が掲げる目的や使命について学び、共有を図りますが、その対象者以外には共有を図る場を提供できていない事が大きな要因として考えられます。次年度以降は会として会員のために新たに学びの場を提供するか、もしくは、様々な役職を経験し、学んだ会員がそれぞれの口から伝えることで、前向きな変化が起こる事を切に願います。

本年度は卒業生として輩出する以上の数の入会を得る事が出来なかった。しかしながらコロナ渦という状況の中でも、本年度入会した会員は積極的に活動に取り組み、活躍していた姿から、来年度以降の活躍が期待できることは大変良い結果に繋がったものと思います。

次年度以降も自分たちの行う活動が社会にとって、また、市民にとって、そして自身の成長にとって必要なものとし、誇りを持って活動を続けることが出来れば、同じ結果を得られるものと思いますので、継続して可能性を持つ青年たちへ成長の機会を与える活動を行って欲しいと願います。

【結びに】

スローガン 「想いをカタチに未来を創造しよう～誰もが笑顔になれる故郷のために～」

私たちは生い立ちも違うし、育った環境も、職種も違う、さらには価値観も違う多種多様な人財の集合体である。しかし、根底には故郷を想う気持ちやこのまちをより良くしたいという気持ちを持つ、いわば志を同じくする同志の集いであるはずです。

そのカタチにしようと思った時、ひとりでは出来ないことも皆で立ち向かえば必ず創れる。誰かが悲しい顔をしている故郷ではなく、皆が笑顔で過ごせる故郷であって欲しい。そんな願いを込めてスローガンとしました。残念ながら、本年度は新型コロナウイルスの影響により、対外事業が思った通りに実施出来ず、涙を呑む結果となってしまいました。私たちの故郷であるいわき市に住む皆を笑顔にすることは出来なかったかもしれませんが、私たちが行ってきた1つ1つのことを紐解けば、確実に未来への種は撒けたのではないのでしょうか。

反省すべきは、コロナ渦にあつて様々な決断を下してきたが、その全てが正しい判断であったとは思えないところである。それによって辛い思いをさせてしまったことは、理事長である自分の至らなさに起因するものである。その反省すべき点を真摯に受け止め、徹底的に検証と引継ぎを行い、新たな組織体制で2021年度の運動を確実に進めて頂きたい。

公益社団法人いわき青年会議所 第16代理事長 齊藤 和治